

# 1920年代中国社会における「新婦女」

——『婦女雑誌』を主なテキストとして——

何 玮

This article focuses on *The Ladies' Journal* (Funü Zazhi) published by the Commercial Press from 1915 to 1931, along with other texts to examine the discourse on the “New Woman” (xin funü) in Chinese society in the 1920s. My article aims to analyze how male intellectuals ignored the differences among women whose actual lives were diverse by constructing a singular or uniform image of women as the “New Woman” (xin funü). Through this process, they also contrasted the image of the “new woman” with that of the “old woman” imposing new meanings on this image. Although this article might not cover all the transformations of “new women,” which are fluid through different eras, I would argue that this article plays an important role in explicating this larger transformations of “new women.” I also believe this approach will shed new light on the understanding of Chinese modernity.

キーワード：1920年代、中国社会、男性知識人、新しい女性、「新婦女」

---

## はじめに

本稿は、1920年代の中国社会に誕生した「新婦女」言説の位相、その「新婦女」を取り巻く規範の具体的な内容及び「新婦女」という言葉に付与された歴史的な意味付けを究明することを目的とする。拙稿「近代中国女性史における『婦女解放』の一考察」（何 2003、pp. 399—405）で検討したように、1990年前後から、中国大陸と台湾では、近代中国女性史に関する研究が盛んに行なわれ、研究成果も数多く現れるようになってきた。しかし、従来の研究には、「女性」を均質の集合体として叙述してきたこと、陳独秀、胡適、魯迅などの五四時期の「代表的な男性知識人」の「婦女解放」に関する言説を、五四時期及びその延長線としての1920年代における男性知識人全体の言説を統括できる、いわば普遍性を持つものとして処理したことや、そのような処理に由来した20年代の新聞や雑誌などのメディアに散在していた数多くの「通俗的な男性知識人」<sup>1</sup> 言説に対する考察の怠慢が見られるなどの問題性が存在している（何 2003、pp. 399—405）。ここで、「代表的な男性知識人」とは、西欧近代思想を中国社会に移植しようということを何よりの急務と考える五四時期の男性知識人を示し、「通俗的な男性知識人」とは、同じく西欧近代思想に出会いつつも、現実の生活を優先する高学歴の職業的知識階層の知識人及び高いレベルの教育を受けている男子学生を指す。1920年代の男性知識人の言説は同時代の女性史研究にとって、どの

ような意義を持っているのだろうか。女性に関する男性知識人の叙述から浮かび上がった彼らの言説の内実と歴史的な意義とは何であろうか。

後述するように、1920年代に入っても、在学中の女子学生や女子教育の経験者がまだ少数に限られているなか、当時の新聞や雑誌などのメディアに寄稿していたのはほとんど男性知識人と推察できる。これは、次の二つのことを含意する。まず、1920年代の中国社会を経験した女性がほとんど健在ではない今日、当時の女性の現実生活が如何なるものであったのかを把握するのに、その時代の新聞や雑誌に掲載されていた男性知識人の叙述から明らかにしていくことは、限られた手段のなかの重要な一つと思われる。また、20年代の女性の現実生活を規定する女性に関する諸規範の形成に、主導権を握ったのも男性知識人と思われる。要するに、1920年代の女性の生活実態や女性に関する規範内容、文化表象としての「新婦女」を可視化するには、男性知識人の言説が重要な資源となり得ると考えられるのである。

実際、1920年代の中国は数多くの雑誌が刊行され、雑誌出版の盛期を迎えた時代であった（許敏 1999, p. 178）。だが、特に中国大陸で展開された近代中国女性史研究においては、社会史研究の角度から、これらの雑誌史料を活用しようとする動きは増えてきたものの<sup>2</sup>、未だに低調な姿勢が維持されているのが現状である。

本稿においては、従来の研究に存在した問題点、即ち叙述する主体——男性知識人と叙述される主体——女性を、それぞれ均質的な集合体として取り扱うということを、再び繰り返さないように注意しなければならない。そのうえで、このような問題点を抱えてきた従来の研究を乗り越えるために、本稿において、従来の研究で等閑視された、「通俗的な男性知識人」の言説にスポットライトを当て、彼らが如何に女性を叙述しようとしていたのかを考察する。彼らの叙述が結局、女性を取り囲む生活状況をどのように変えたのかも考察に入れることにする。また、既に多くの蓄積が見られる五四時期の「代表的な男性知識人」の女性に関する議論と対照することによってその共通点と相違点も分析してみる。

本稿では、中国大陸、台湾、日本における20年代の中国社会の「新婦女」研究が非常に少ないなか、今後、近代中国における新しい女性に関する研究を深めることにつながるような基礎的な探究を試みたい。具体的に言えば、当時の男性知識人の言説を主な分析対象とするほか、「新婦女」自身の言説や当時の雑誌などに掲載された絵や写真などを紹介し、「新婦女」の表象を分析の手がかりとしたい。このような作業には、男性知識人の構築した「新婦女」像、彼らの言説の背後に潜むその語りの内実を究明すると同時に、「新婦女」の実際の生活形態に接近しようという狙いもある。なお、本稿での日本語訳は、訳者を明記した文献以外はすべて拙訳である。

## 1 「新婦女」研究と『婦女雑誌』

本稿においては、1915年から1931年までに、商務印書館<sup>3</sup>が出版した『婦女雑誌』を主な史料として使用することにする。

『婦女雑誌』が発行部数の多さや17年間も出版され続けていたことなどにより、当時の婦人雑誌のなかで大変重要な雑誌になり得たのは、その編集方針に由来していた。その編集方針はまた『婦女雑誌』を出版する商務印書館の経営策略に左右されていた。つまり、近代中国の出版業界のなかで経営上大変な成功を収めた商務印書館の商業利益を重要視する理念は終始、『婦女雑誌』の編集方針を、雑誌の設定した議論の対象——在学中の女子学生や、近代学校教育の経験者に関する言論の主流に追随させていたの

である。

1915年から1919年までの最初の5年間に、編集主幹の王蘊章は北洋政府の教育指導者たちや社会輿論が提唱した良妻賢母主義女子教育の潮流（羅検秋 1998、pp. 277—280）に乗り、「佐女学」（女子教育に協力するという意味）を『婦女雑誌』の趣旨<sup>4</sup>としていた。良妻賢母主義女子教育に関する議論が大変少なく、如何に近代的な科学知識を生かし、家事、育児などをこなせばいいのかに関する紹介や説明などがその主な内容であった<sup>5</sup>。初期の毎号の発行部数はだいたい2,000部から3,000部くらいにも達した（Jacqueline Nivard 1984、p. 37、p. 50）。ちなみに、1920年代、中国の出版業の中心地である上海で刊行された雑誌のほとんどは、その毎号の発行部数が1,000部から2,000部の程度である（許敏 1999、p. 178）。女子教育に関する教育指導者たちや世間一般の考えに追随しようという編集方針が、数多くの読者を獲得した要因の一つと考えられる。

しかし、特に五四運動を経て、代表的な男性知識人が提起した「新文化運動」<sup>6</sup>の一環をなした「婦女解放」に関する諸議論の社会的な影響力は確実に拡大していった。商務印書館が刊行した『婦女雑誌』を含めた複数の雑誌は、当初、「新文化運動」に素早く反応しなかったため、「新文化運動」の支持者に批判されるようになった（周敘琪 1996、p. 135）ばかりでなく、商業利益の面もダメージを受けざるを得なかった（周敘琪 1996、pp. 142—143）。経営者がこの経営上の消極的な局面を開く手段として選んだのが、思想界のこの新しい動きに呼応することであると推察できる。第6巻1号から、『婦女雑誌』に掲載された口語で書かれた文章が急増し、文語の文章がメインであるというそれまでの状況が一変した。それと同時に、二つの重要なコラム——科学知識の紹介やそれらを如何に生かして家事や育児などに臨めばいいのかを教えることが主な内容となっていた「学芸」と「家政」はその姿を消しきったのである<sup>7</sup>。その代わりに、「社論」や「通論」など新しく開設されたコラムは、「婦女解放」に関する議論の場となった。第7巻1号から、魯迅など「新文化運動」を提唱する男性知識人との付き合いがある章錫琛が主任編集者に着任することで、『婦女雑誌』は誌面のさらなる更新を見せた。その後、「婦女解放」に関する議論の文章が大幅に増え、更に1922年4月に『離婚問題号』、1923年1月に『婦女運動号』、6月に『産児制限号』、1925年6月に『女学生号』、1928年7月号に『婚姻号』などの特集号も編集され、女子教育、貞操問題、社交公開、恋愛・結婚の自由、経済独立などの「婦女解放」に関する様々な議論、「婦女解放」の「先進国」とされた欧米諸国の思想家の理論<sup>8</sup>や、「婦女解放」運動の実際の状況などが『婦女雑誌』の諸頁に氾濫するまでに至った。しかも、「婦女解放」の議論における思考と叙述様式においては、社会進化論と優生学（的）思想が論者の中に共有されていたように見えること<sup>9</sup>も注目すべきであろう<sup>10</sup>。また、良妻賢母主義の女子教育を「婦女解放」の障害として批判する論調が多く見られるようになったのもこれ以来のことである。

誌面の更新は『婦女雑誌』に二つのことをもたらした。まず、販売数の著しい増加であった。婦人雑誌の販売数の新記録を樹立し、『婦女雑誌』の毎号の販売数は5,000部以上にも達したと周敘琪が推測している（周敘琪 1996、p. 45）<sup>11</sup>。次に、男性知識人が主導した「婦女解放」に関する検討の潮流に乗ったことである。このことは結局、『婦女雑誌』を再びその時代の主流言説<sup>12</sup>を見せる舞台にさせた。

要するに、『婦女雑誌』の編集方針を左右した商務印書館の経営方針は、『婦女雑誌』の内容を終始、当時、いわゆる「知識階級の女性」<sup>13</sup>に関する主流的な考えや議論に追随させようとしていた。同時代のほかの婦人雑誌と比べ、『婦女雑誌』が長く出版され続けていったのは、編集方針に由来した販売上の成功と深く関わっていた。また、商務印書館の販売網<sup>14</sup>も、『婦女雑誌』を中国の幅広い地域や海外の読者

の手に届けるような環境を整えた。『婦女雑誌』がその時代のメジャー雑誌になり、大変な影響力を持つことができたのは、このような背景があったからである。

従って、1920年代の「知識階級の女性」である「新婦女」<sup>15</sup> 研究をするには、この雑誌に掲載された、主に男性知識人が作り上げた「新婦女」言説を分析することが適切であろう。実際、20年代に生きた「新婦女」に関する彼らの叙述や議論には、批判や期待の声がほとんどであった。では、男性知識人の言説に現れた、「新婦女」とは、如何なる存在であったのか、それを次に考察することとする。

## 2 1920年代の中国社会における「新婦女」の位相

### (1) 本稿における「新婦女」の定義

「新婦女」<sup>16</sup> という言葉は、「五四運動」以後、一つの新造語、流行語として、中国社会に頻用されていたことが、雲舫「新婦女所應鏟除的幾種劣根性」(第6巻9号)<sup>17</sup> と、黄河済「新婦女應有的覚悟」(第6巻10号)<sup>18</sup> の叙述や、次に挙げる、「今日婦女的兩難」(第10巻3号)における顔筠の「新婦女」を定義しようとする姿勢から窺える。

では、20年代の中国社会において、『婦女雑誌』に寄稿していた男性知識人が、「新婦女」という新しい造語を、どのような女性たちに投影しようとしていたのか、その女性グループの社会的な属性について考察したい。

[女性の]新しいと旧いの区分の仕方も、それぞれ違っている。知識の有無を基準とする人は、新しい知識を習得し、しかも人生観を持っている女性を新婦女と呼ぶ。[この場合]中学以上の学歴を有するものが、ぎりぎり新婦女のグループに入れるのであるが、高等小学校以下の学歴を有するものは旧婦女に区分されるだろう。経済状況を基準とする人は、自分で働いて生活し、男性に頼っていない女性を、新婦女と見なす。……またそうでない女性を旧婦女と見なす。体の状態を基準とする人は、体に人為的な障害のない女性を新婦女と呼び、例えば、天然の足を有するものは新婦女であり、人為的な障害(纏足を指す——筆者注)が残っている女性は旧婦女と呼ぶ。……しかし、私は今解放の能力の有無を基準とし、自ら解放の覚悟と能力を有する女性を、新婦女と称する。[逆に]自ら解放の覚悟と能力を持っておらず、男性が彼女を解放することに頼って、彼女自身は解放される位置にいる女性を、旧婦女と称する<sup>19</sup>。

20年代の中国社会においては、「新婦女」と「旧婦女」を区別する際、知識の有無、経済状況、身体状態(纏足か否か)、自分を解放する経済力の有無など、基準が様々であり、一つの基準に固定されていなかったということが、この顔筠の文章から窺える。これらの基準は互いに異なるように見えるが、結局いずれも近代学校教育の経験の有無ということに収束している。なぜならば、「新婦女」であるか否かを判断する際の共通した外形的基準は、近代学校教育の経験者であるか否かであった。このことは「貴族式的新女子」(第11巻4号)<sup>20</sup> や、「女権与知識」(第10巻4号)<sup>21</sup> から読み取れる<sup>22</sup>。しかし、近代学校教育の経験者になるためには、進学させることが可能な経済的な家庭環境、学校教育の必要性を感じる親の認識などが基盤になければならない。なお、近代学校教育の経験者の家庭の経済状況に関する考察は別の論文に譲る。

これらの文章をはじめ、『婦女雑誌』に紹介される「新婦女」の実態や役割提起の内容を総合すると、20年代の「新婦女」とは、中等教育以上の学校、専門学校や大学に在籍中の女子学生と、それと同じレベルの教育を受けた、近代学校教育の経験者、当時、「知識階級の婦女」と呼ばれた女性によって構成された集団を指すと一般に見なされていたと考えてよい。本論文においても、「新婦女」の学歴については、中等学校以上の学校在籍者及びその経験者を示すことにしたい。

では、20年代の中国社会において、上述のような「新婦女」の数はどれくらいあったのか。彼女たちは女性全体のなかで、どのような存在であったのか。これらの問題を解明するため、当時の女子教育の実態を把握しておこう。

## (2) 20年代中国社会の女子教育の実状

中華教育改進社が1922年から1923年までの間に行なった、教育の実情に関する調査資料<sup>23</sup>を主に利用し、20年代初頭における中国の女子教育の全体的な状況を考察していこう。

表1 中国全土の教育機関在籍学生の状況（1922～1923年）<sup>24</sup>

各レベルの教育機関	女子学生数(人)	学生総人数(人)	女子学生の比率(%)
初等小学校	368,560	5,814,411	6.34
高等小学校	35,182	582,479	6.04
中学校	3,249	103,385	3.14
師範学校	6,724	38,277	17.57
甲種職業学校	1,452	20,360	7.13
大学	887	34,880	2.54

出典：俞慶棠「三十五年来中国之女子教育」李又寧編『中国婦女史論文集 第1輯』台湾商務印書館（台北）、1981年 pp. 343—377に引用された、中華教育改進社の調査データから筆者作成。

表1が示しているように、1922年から1923年までの間に、中国全土の初等小学校、高等小学校、甲種職業学校、中学校、師範学校、大学では、女子学生がそれぞれの学生総人数の中に占めた比率は6.34%、6.04%、3.14%、17.57%、7.13%、2.54%である。このデータは、近代学校教育を受けることにおいて、男女の間に機会の格差が激しいこと、そして、中等教育レベルの師範学校を除き、各レベルの教育機関に在籍している女子学生数が極端に少ないことを物語っている。また、表1を20年代の半ばと末頃の教育に関する調査結果や先行研究<sup>25</sup>と合せて検討した結果、次のことも明らかになる。つまり、20年代の中国社会において、各レベルの教育機関に在籍している女子学生の中では、初等教育を受けている生徒の数が圧倒的に多いのに対し、中等以上の教育を受けている女子学生数は僅かしかいないのである。また、中等以上の教育を受けている女子学生の中では、中等レベルの学校——中学校や師範学校などに在籍している女子学生数が、その大部分を占め、大学や専門学校のような高等教育機関に進学する女子学生は、極めて少なかったのである。

次に、表2のデータを利用し、1927年と1928年の江蘇省の統計を分析してみよう。ここで江蘇省を取り上げるのは江蘇省は当時の近代学校教育の先進地域であるからである<sup>26</sup>。1928年の場合、江蘇省全体の小学校、中学校、師範学校、職業学校において、女子学生がそれぞれの学生総人数の中に占めた比率は、18.01%、21.28%、26.21%、51.56%であった。職業教育の分野では、女子学生の在籍率は50%以上であったが、その他の小学校教育や、中学校教育、師範学校教育の場合、女子学生の人数は、それぞれの

学生総人数の四分の一程度であった。当時、中国のなかでは、近代学校教育が発展した地域であった江蘇省がこのような状況であるから、中国全体の女子の学校教育の情勢は、20年代の後半になっても、依然として低迷状態が続いていたことが分かる。

表2 江蘇省の教育機関在籍学生の状況（1927年、1928年）<sup>27</sup>

地域別・年別 女子学生在籍状況	江蘇省各県 (1927年)	江蘇省全体 (1928年)
小学校女子生徒数(人)	78,196	108,135
小学生総人数(人)	457,776	600,728
小学校女子生徒の在籍率(%)	17.08	18.01
女子中学生数(人)	2,889	4,253
中学生総人数(人)	11,103	19,984
女子中学生の在籍率(%)	26.02	21.28
女子師範学生数(人)	／	1,005
師範学生総人数(人)	／	3,829
女子師範学生の在籍率(%)	／	26.21
女子職業学校の在籍者数(人)	742	921
男子職業学校・女子職業学校の 在籍者総人数(人)	2,238	1,786
女子職業学校の在籍者の在籍率(%)	33.11	51.56

出典：俞慶棠「三十五年来中国之女子教育」李又寧編『中国婦女史論文集 第1輯』台湾商務印書館（台北）、1981年 pp. 343-377に引用された、中華教育改進社の調査データから筆者作成。  
省の下に市と県が並行的に置かれるのは当時の民国政府の地方行政制度であった（袁継成 1991、pp. 449-472）。

以上の分析は、1920年代を生きた「新婦女」の数が全体的に非常に少ないこと、また、中等教育の女子学生やその経験者が「新婦女」の主体であったことを導きだす。「新婦女」たちは、どのように生き、また彼女たちの存在は、集団としての特徴が示し得るものであったのだろうか。

### 3 「新婦女」における「学歴」の社会的機能

次に、『婦女雑誌』に現れた「新婦女」ディスコースを作り上げる主体となっていた男性知識人が構築した、20年代の中国社会に生きた一つのグループとしての「新婦女」の集団的な特徴を探ってみる。なお、「新婦女」自身の声なども考察の視野に入れることによって、男性知識人の言説に理論化された「新婦女」と「彼女たち」の間にどのような乖離が見られたかも留意する。

私が本当に心を痛めているのは、たくさんのお母さんが、娘を学校に入れることを、本当に、娘に教育を受けるチャンスを与えたいと考えているのではなく、[ただ]娘のための嫁入り道具と見なしていることである。女子学生自身も『この父にして、この子あり』というように、ただ学校で勉強することを、結婚するための恰好の手段と考え、学歴を嫁になるための立派な看板だと思い込んでいることである！<sup>28</sup>

学校教育を受けることの目的について、勉強することはただ知識を求めただけではなく、ただ独立の土台を用意するだけでもなく、最も肝心なのは正しい人生観を獲得するためなのだ<sup>29</sup>と主張する胡焦琴

などのような「新婦女」が存在しているにもかかわらず、林文方の「我所希望於女学生者」のほか、胡懷琛「女子職業問題」（6巻10号）、楊幹青「對於婦女運動的幾個意見」（9巻5号）、顧實「對於新女子の罪言」（9巻12号）、陸鎰之「女子受了教育当怎樣」（10巻1号）、健孟「婦女職業的先決問題」（10巻6号）などの男性知識人の文章においては、近代学校教育を「結婚のための恰好の手段」と思い込む「新婦女」ばかりが議論の対象と批判的になっていた。

一方、『婦女雑誌』第9巻11号——『配偶選択号』という特集号のなかに、編集者は「わが国現代における若い男女の配偶の選択の傾向を窺う」<sup>30</sup> ため、「『我之理想的配偶』をテーマにして、若い男女の意見を求める」<sup>31</sup> ことにしていた。寄せられた文章の整理と分析を通じ、編集者は若い男性たちが「その配偶者の教育〔状況に関して〕は、中学校程度を要求したのがその大多数であった。」<sup>32</sup> と結論付けた。

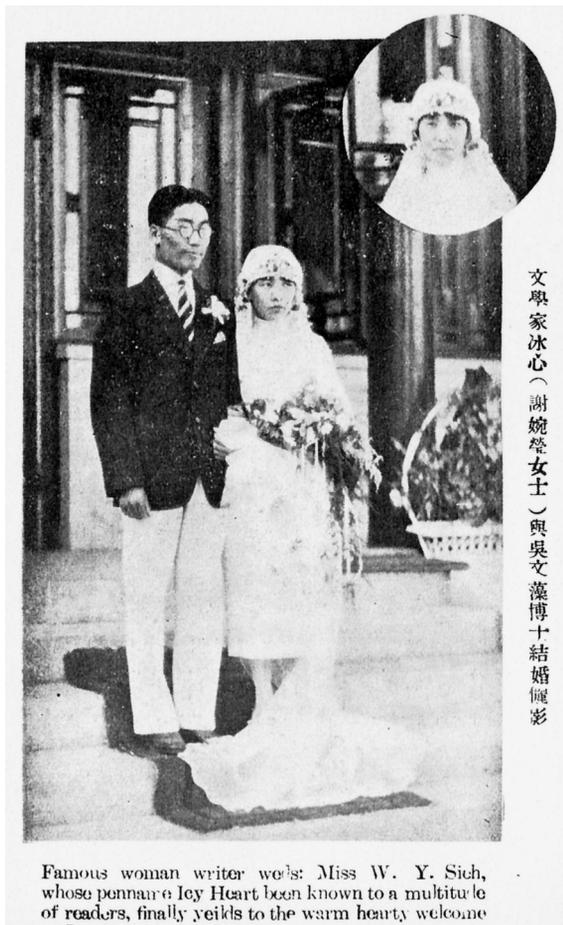
1926年に創刊され、後に大変な影響力を持つようになった『良友画報』<sup>33</sup> には次の写真が掲載されている。



写真1 周淑蘋と李祖侃との結婚式

第36期の「婦女界」というコラム<sup>34</sup> に、上海中西女塾で勉強した経験を持つ周淑蘋と、エンジニアである李祖侃との結婚式の写真が掲載され、その写真に添えられた紹介文には「前上海中西女学の女王周淑蘋女士(本雑誌第23期の表紙人物)とエンジニアである李祖侃氏との結婚式で撮影」(傍点は筆者による)などと書かれている。

また、「婦女界」第38期には、近代中国初期の女性作家の一人——冰心と吳文藻博士との結婚写真や、国立音楽院教授方于教授<sup>35</sup> と美術専門学校の教授李丹との婚約写真などが掲載されている。



文學家冰心（謝婉瑩女士）與吳文藻博士結婚攝影

Famous woman writer writes: Miss W. Y. Sich, whose pennant of Joy Heart been known to a multitude of readers, finally yields to the warm hearty welcome

写真2 冰心と吳文藻との結婚写真



夫唱婦隨 國立音樂教授院方于女士與美專音樂教授李丹君訂婚攝影（現已結婚）

A pair in harmony Miss Fang Yue and Mr. Li Tan, both in musical profession, were united in marriage recently

写真3 方于と李丹との婚約写真

冰心はかつて福州女子師範学校、北京の貝満女学校、協和女子大学、燕京大学、アメリカの Wellesley College で学び、1926年に修士号を取得した経歴を持つ（馬良春 1991、pp. 2273-2274）、近代学校教育の経験を有し、学歴を持つ「新婦女」の象徴的な存在である。これらの「新婦女」の写真が見られる存在として掲載されることは、当時、『良友画報』の主な読者層と思われるホワイト・カラーの若い男性たち<sup>36</sup>が配偶者を選ぶ際の一般的な基準を暗示しているだろう。

要するに、近代学校教育を「結婚のための恰好の手段」と思い込む「新婦女」に対する、男性知識人による大いなる批判は彼女たちの就学の目的の多様性、すなわち経済的な独立や、正しい人生観を獲得しようという目的があったことを不在にしてしまった。また、20年代において、この批判は多くの青年男性知識人たちの結婚相手に対する学校教育経験に関するこだわりと平行的に存在している。このように、男性知識人内部においても、その考えの相違と矛盾が存在していたことに留意すべきである。

次に、前述した『婦女雑誌』第9巻11号——『配偶選択号』のなかで、編集者が設定した『我之理想的配偶』というテーマに寄稿した青年男性知識人の考えを検討し、学歴が女性の身分を標記することの意味を探ってみよう。「旧式の女性がただ、子供をむやみにかわいがって、正当な教育を施すことはありません。」<sup>37</sup>しかし、師範学校を卒業した女性は、「普通の常識〔については〕、もともと旧式の女性が比べられるところではないし、子供を管理し、教育することに関しては、標準に合い、学校側に多大な協力

ができ」<sup>38</sup>。それだけではなく、「普通の手紙の〔読み書き〕や、〔家庭の〕できごとをきちんと書き記し、日常の出費の計算〔をすることにも〕当然、余裕をもっているのだ。」<sup>39</sup>また、理想の配偶者は、中等以上の教育を受けた女性という条件を出した一人——楊尚松は、その理由について、教育を受けた女性こそ、愛が分かり、お互いに夫婦愛が感じられ、従来 of 奴隷と主人のような関係ではなく、愛のある夫婦関係が築ける<sup>40</sup>と述べている。東呉大学の学生である T.Y. は、中等レベルぐらいの教育を受けた女性が、自分との間に知識の差がそんなにあるわけでもなく、お互いに理解しやすいし、議論もでき、協力もできるなど<sup>41</sup>と述べている。

要するに、「旧婦女」ではなく、学校教育の経験者である「新婦女」こそが、近代的な主婦としての役割が果たせると青年男性知識人はいう。夫婦間の知的関係に対する彼らの拘泥からは、次のことが窺えよう。五四運動期に代表的な男性知識人に提起され、後により多くの男性知識人によって受け継がれた「婦女問題」に関する諸議論のなかに現れた、「愛」という言葉の担った儒教文化批判というイデオロギーの役割が（孟悦・戴錦華 1989、p. 序論43）、如何に20年代の青年男性知識人を取り囲む実際の生活で機能していたのかということである。しかし、代表的な男性知識人が「民主」と「科学」と同じように、信念としての夫婦平等の純粋な精神愛を唱えるにあたっては、西欧近代思想を中国社会に導入しようという願望を持っていたのに対し、青年男性知識人は夫婦愛を、円満な結婚生活を保証する重要な条件と考えていた。ところで、彼らの結婚相手に対するこだわりは、当時の社会に如何なる影響を与えていたのだろうか。

五四運動の影響で父親に学校に入れられ、20年代を生きた「新婦女」の一人——郭如善が次のように追憶している。

五四の風が家にも吹き込んだ。父と叔父もこの風が強くて、拒むことができないことは感じていた。そのため、私といとこの本誠（いとこの名前——筆者注）が家の中で従来、女の子に与える教育を受けてから、同じ学力の資格で中学校の試験を受け、入学できた。私の父と叔父が男女平等の考えに賛成なわけではなく、ただ時代の潮流に適応するため、女の子の私たちを世間に出し、新式教育を受けさせたと思う。当時、たくさんの離婚のケースが見られ、家のなかの旧式の妻を捨て、また外で女子学生と結婚するのは若い男性の間にしばしばあることであった。まだ結婚していない若い男性は、学校で勉強したことがない、旧式の女性と結婚したくないのである。多くの親が娘の結婚のために、彼女たちを外に出して、中学校や師範学校ぐらいの勉強をさせ、その後の進学を許さないのである。学歴があまりにも高すぎると、結婚相手が簡単に探せないことを避けたいからなのである。<sup>42</sup>

郭如善が述べているように、彼女の父や叔父は五四の風が強くて、拒むことができないと感じ、「男女平等の考えに賛成なわけではなく、ただ時代の潮流に適応するため」に、彼女といとこを学校に入れたのである。その時代の潮流とは、郭如善のいう「当時、たくさんの離婚のケースが見られ、家のなかの旧式の妻を捨て、また外で女子学生と結婚するのは若い男性の間にしばしばあることであった。まだ結婚していない若い男性は、学校で勉強したことがない、旧式の女性と結婚したくない」ということであり、周建人のいう「たくさんの男性は、学校教育を受けた女性しか、お嫁としてもらわないと思込んでいる。」<sup>43</sup>ということであり、TWD のいう「旧式の女性が現代の若い男性の気を引くことができない」<sup>44</sup>

ということである。要するに、近代学校教育を受けたことがあるか否かは青年男性知識人が配偶者を選択する際の重要な基準になっているということだ。これは親たちが娘の近代学校教育を重要視するようになった要因の一つであろう。

ところで、呉謹銘が、「我国目前婦女運動應取の方針」というコラムにおいて、女子の学校教育の発展状況には、都市と都市以外の地域との間に差が存在し、特に奥地では、貧しい家の娘はいうまでもなく、裕福な家庭の娘も、その親が「女は才なきを以て徳とする」という規範に支配され、娘を学校に行かせる意志を持っていないため、学校教育の経験を有していないことや、女学校の数が極端に少ないことを述べている<sup>45</sup>。郭如善の追憶によれば、「その時、『男女平等』の思想は各都市では流行っているけど、田舎では全然受け入れられていない。田舎の人が新式的女子学生を見慣れなくて、彼女たちを変わり者と思見なしている。」<sup>46</sup>のである。

『婦女雑誌』に頻出する、「新婦女」に関する批判的な言説や、呉謹銘の叙述と郭如善の追懐とを対照すれば、次のことが推測できるだろう。

女性にとって、近代学校教育を受けることが、当然のことであり、必要なことでもあるという考えは、20年代の中国の都市社会に既に受容され、定着していたことである。近代中国の女性にとって、新式教育である近代学校教育は、清末にスタートした当初は、それまでの中国社会で、絶対的な支配力を持った儒教文化の女性規範との衝突のため、世間一般に受け入れられがたいものであった<sup>47</sup>。しかし、20年代では、そのような状況が既に一変したことは、前掲の林文方の文章などから推察できる。

清末から民国初期にかけての間に、中国の都市社会では、女子学生の親や彼女ら自身が近代学校教育に関する考えの変化がどのような理由で、如何なる推移過程を経由していたのか。学歴が身分を標記するようになる前に、女性の身分を標記する事柄は何であったのだろうか。これらの問いに答えるためには、女子教育の胎動期ともいえる清末の状況に注目する必要がある。豊富な新聞、雑誌などの史料を駆使しながら清末の状況について検討を加えた先行研究とえば、夏曉虹の『纏足をほどいた女たち』(1998)が挙げられる。しかし、綿密な論理展開がなく、史実確認のレベルに留まったのは夏氏の研究の限界である。したがって、学歴が女性の身分を標記するようになる歴史的な要因については、夏氏の究明した歴史的な事実を手がかりにしながら次のように整理してみる。

清末に入ってから、中国在住の西洋人宣教師たちは、彼らの発行する中国語の新聞で、纏足を女性美の身体的表現であり、身分を標記するものでもあるという中国の世間の人々に守られていた観念に、大いに反対した。彼らの影響を受け、維新派の康有為、梁啓超らも、「富国強種」という国家、民族の視野で、纏足反対論を主張し、広東省や上海などで「不纏足会」を創設した。19世紀の末頃から20世紀の初頭にかけて、上海、蘇州、武昌などの各地で、纏足に反対するブームが起きたのは維新派メンバーの努力の結晶ともいえる。このブームのなかで、纏足は次第に女性美の基準や女性の身分を象徴するものから、「畸型」と「廃疾」の象徴へと変わってしまった(夏曉虹 1998, pp. 19—38)。維新派メンバーの間では、常に纏足反対と女子教育の提唱とを一体のものと考え、実践していたため(夏曉虹 1998, p. 39)、彼らの活動は、纏足が身分を標記する機能を喪失した時、女子教育の経験の有無、学歴を新たな身分標記の手段として浮上させる土壌を用意していたと考えられる。

時が五四運動期に移り変わり、青年男性知識人が配偶者の学歴に拘わるようになると、親たちが娘の学校教育を重んずる傾向が生じてきた。これが学歴を、女性の身分を標記するものとして成り立たせる決定的な要因であったと思われる。

#### 4 「新婦女」における身体表現

男性知識人は「新婦女」の纏足廃止や近代学校教育の経験に注目したほか、社会に顕在化した「新婦女」の姿、化粧や服装についても並々ならぬ関心を持って語っている。「新婦女」の化粧や服装といった身体表現における彼らの熱心な態度からは何が読み取れるだろう。

ファッションを追うのは、新婦女に共通している癖だ。彼女たちの格好を見てごらん。お金もかかるし、体にも良くない影響を与えてしまう。胸を締め付けたり、ハイヒールを履いたり、羅克<sup>48</sup>の度のない眼鏡を掛けたり、おしろいを塗ったり、外国産のほおべにをつけたり、着飾るのに、枚挙に遑がないほどさまざまな工夫があるのだ。私は別に、新婦女の全てがこういう格好をしていると言い切るわけではないけど、しかし、うえに挙げたような癖を持っている〔新女性〕が、実に少なくない、〔これは〕女性の間にも認められている弱点なのだ。<sup>49</sup>

彭善彰「女権与知識」(10巻4号)に現れたような、「新婦女」とファッションに関する議論は、『婦女雑誌』によく見られるものである<sup>50</sup>。現段階では、20年代の女性の服飾に関する研究がまだ綿密に行なわれていないため、今後もそれに関する研究の積み重ねが必要と思われるが、男性知識人や「新婦女」自身の議論<sup>51</sup>を通じ、当時のファッションとは胸を締め付ける<sup>52</sup>ことや、ハイヒールを履くこと、パーマをかけること、おしろいを塗ること、宝石などの装飾品をつけることなどであることが窺える。

まず、胸を締め付けることを一例に、当時「新婦女」の間に流行ったファッションの特徴の一端を見てみよう。羅蘇文によれば、清朝において、女性の服装はその上着がゆるくて、膝下までのびているほど長く、女性の身体の曲線を完全に隠すのがその特徴のひとつである(羅蘇文 1996, p. 179)。しかし民国初期に入って、日本に留学している女子学生から大きな影響を受け、中国国内の女子学生の間では、「文明新装」が流行していた。即ち、上着は小さくて長いが、スカートは模様がなく長くて黒いという服装で、更に、かんざしや、イヤリング、指輪などの飾りが一切ないものである(華梅 1989, p. 91)。五四運動前後、飾りが一切なく、白い上着と黒いスカートの「文明新装」は女子学生の典型的な服装となっていた(呂美頤 1994, p. 52)。上着に見られた、「ゆるくて、長い」から「細長い」への変化は、中国の服装が日本経由で、女性の曲線を示す欧米の服装の理念を取り入れたことを反映している。しかし、性的特徴の露出をタブー視するという在来社会にあった女性の服装に関する規範を内面化した女子学生たちは、細長い上着を選ぶ時、胸を締め付けることで、身体の性的な特徴を隠していた。周鈺琪(1996)によれば、女子学生が胸を締め付けることによって、身体をまだ性的な特徴のない子供と同じように見せ(周鈺琪 1996, p. 89)、男性の肉体的な欲望を促すことのない、純潔なイメージを伝えようとしたと解釈できる。「文明新装」は中国社会が女性の体の曲線を示す欧米の服装の理念を如何に摂取していったのかを物語っているだろう。

ファッションは「衛生、経済、時間、自然」<sup>53</sup>に背くことであり、「決して〔物事を判断する時の〕合理的な基準」<sup>54</sup>ではないと、男性知識人は近代医学や近代的な時間観念を援用し、ファッションにネガティブな意味合いを附与している。しかし、虚栄心に満ち、見識が浅薄で、卑俗である「新婦女」たちは、勉強に専念せず、社会問題にも関心を払わず、ひたすらファッションに熱心に追随している<sup>55</sup>と男性知識人はいう。様々なファッションを追うことで、派手な格好をするのは男性の好みに迎合し、自ら男

性の附属品になろうという振る舞いであり、それは「婦女解放」の障害であり、更にいえば、娼婦が男性の性的欲望を呼び起こすことを目的とした振る舞いでもあるため、高尚な人格を有すべき「新婦女」のやることではない<sup>56</sup>と男性知識人たちは、「新婦女」がファッションを追う行為を、否定的に解釈し、酷評している。「新婦女」たちはまず意識的にファッションと一線を引き、質素な身飾りで知的な存在というイメージを作り上げ、それからファッションを追うような世の中の悪風を是正する責任を果たすべき<sup>57</sup>と彼らは「新婦女」の女性集団における役割を位置づけている。

「新婦女」のファッションに関する男性知識人の批判は次の社会的な状況に由来するだろう。当時、「新婦女」の一人である梁珠心は、纏足のような「伝統的」な習慣と、コルセット、ハイヒールといった「近代的（西洋的）」なファッションをともに「陋習」として考えていても、その「陋習」から「抜けようと思っても、抜けられない」<sup>58</sup>状態に陥って、結局、当時のファッションを再現する以外には選択肢がないと述べている。そのため、梁氏は「これはなんと辛くて 悲しいことだろう！」<sup>59</sup>という精神的な苦痛や分裂に直面せざるを得なかったのである。ファッションを追う意識が一部の「新婦女」の間にかかなり定着していることは、この梁氏の語りから窺えよう。

一方、ファッションに関しては、男性知識人と意見を共有し、更にそれを実践したのは、郭如善のような「新婦女」である。

高校の時を思い出すと、私たちに国文を教える孫先生は、当時最も活躍している新女性〔の一人〕である。彼女は黄廬隱、謝冰瑩のクラスメートで、新しい詩を作るのである。彼女は私たちに対し、文語ではなく、必ず全部口語で文章を書くように決めていたのである。それ以来、私は新文学運動の洗礼を受け、家の塾で習った桐城式の書き方（つまり、文語の書き方——筆者注）を止め、『的呀嗎啦』の口語を書き始めたのである。彼女がよくいう言葉は『二つの圧迫の下』である。その意味は、中国人は列強の帝国主義の圧迫の下にいるが、中国の女性は列強の帝国主義者による圧迫だけではなく、古い儒教の束縛も受け、男尊女卑の不平等の待遇に耐えなければならないということである。従って、女性は男性に付き従うのではなく、必ず独立した人格を獲得するよう、頑張らなくてはならない〔と彼女は思っていた〕。『女為悦己者容』（女は自分を愛してくれる男のために容姿を整えるという意味——筆者注）は彼女が最も嫌いな諺である。女性がおしろいを塗ったり、ほおべにをつけたり、派手な服を着ることで男性の気を引くのは、自分を軽んじる行為であると〔彼女は〕思っている。〔彼女から影響を受け、〕私はそれ以後長いイヤリングを取り外し、おしろいとほおべにを洗いとって、ずっと質素な断髪にするに至った。<sup>60</sup>

最初に代表的な男性知識人によって提起された新文学運動、「婦女解放」は、黄廬隱、謝冰瑩、そして郭如善に国文を教えていた孫氏など、五四時代の最初の「新婦女」たちに受け入れられ、実践されていた。孫氏の取った行動とは、新しい詩を作ることや、学生に文語ではなく、口語で文章を書くことを要請することなどである。孫氏にとって、女性が独立した人格を獲得するための行動の一つとは、「男性の気を引く」ために、「おしろいを塗ったり、ほおべにをつけたり、派手な服を着る」という「自分を軽んじる行為」、「男性に付き従う」行為を放棄することである。孫氏の教えや影響を受け、口語で文章を書き、「長いイヤリングを取り外し、おしろいとほおべにを洗いとって、ずっと質素な断髪にするに至った」郭如善のような学生が現れてきた。この孫氏や郭如善にとって、男性の目を引くような派手な着飾りを

放棄することは、文語で文章を書くことを止めることと同じように、古い儒教文化に反抗する意志表現であり、手段である。『婦女雑誌』に掲載された曾志学や醒のような、当時の「新婦女」の声<sup>61</sup>と合せて考えれば、20年代の「新婦女」たちが、男性知識人の「婦女解放」言説を内面化し、彼らの論調に追随している姿を浮かべることができる。「伝統」批判という大きな歴史的な文脈のなかで、男性知識人及び「新婦女」たちの議論によって、「西洋化」した種々の「新婦女」のファッションは、「古い儒教」にある「男尊女卑」思想を包含する汚染装置として見なされた。ファッションを意識的に拒絶し、質素な身飾りをしてきた孫先生や郭如善のような「新婦女」たちはまさに男性知識人が「新婦女」に求めた「正しい」生き方をしている「新婦女」である。しかし、男性知識人が描き出した「新婦女」像はこの「新婦女」の存在をほとんど遮断してしまったのである。

「新婦女」たちが身体表現における多様な理解と実践をしていたこと<sup>62</sup>は郭如善の追憶や『婦女雑誌』に点在した「新婦女」たちの疎らな声から窺える。男性知識人の「新婦女」の身体表現に関する議論には、彼らの「新婦女」の就学における目的論に関する議論と同じように、「新婦女」は西洋から舶来してきた様々なファッションに耽溺し、派手な身飾りに夢中になっているという存在<sup>63</sup>として画一的に語られたという類似点がある。彼らの「新婦女」のファッションに対する非難は、おそらく、外見的には、その「新婦女」が娼婦と非常に酷似しているように見え、女性集団内部の秩序に混乱を招いてしまうという危惧を感じ、外見的な類似性を除去することで、女性集団内部の差異化をはかる一端にしようという潜在的な欲望が作動したことに由来するだろう。

## 5 「新婦女」への意味付与

第3節と第4節においては、男性知識人の「新婦女」に対する批判とあるべき姿とする言説を検討した。一方、彼らの「新婦女」に対する期待も多大なものであった。次に、その期待の具体的な内容を浮き彫りにすることによって、彼らの「新婦女」に付与した歴史的な意味付けを透視することにする。

同じ社会のなかでは、学生と学生でない人との間に、本来区別があるわけではありません。学生の服は学生でない人でも着ることができないわけではありません。しかし、現在は、社会には学生数が少ないため、珍しい存在になりました。従って、今非常に虚栄心を持っている人は、学生が世の中で尊重される人間であるため、彼女が女子学生ではないのに、服装を学生の真似しています。〔彼女は〕、ほかの人に学生のように思わせることで、尊敬され、虚栄を張っています。<sup>64</sup>

女子学生がその服装が真似されるほど、女性全体のなかで特別視される存在であったということはこの夢寰の演説から読み取れる。ファッションに追随することをやめることで、社会の不良な風儀を矯正しよう<sup>65</sup>と、徐学文が女子学生に提言したことには、このような背景があったからなのであろう。この序列化された女性集団の状況に直面し、男性知識人は多大な期待を「新婦女」に寄せることにしていた。

「新婦女所應鏟除的幾種劣根性」において、雲舫は「新しい女性たちの見識は、必ず従来の女性たちと違っている。」<sup>66</sup>というフレーズ文章を7回ほど繰り返し、「旧婦女」との違いを強調することで「新婦女」を定義している。このように、男性知識人は、常に「旧婦女」を在来の中国社会の女性に関する諸規範の媒介とする一方、「新婦女」をその対極的な存在として記述する、言い換えれば、「旧婦女」との二項

対立の構図の中で「新婦女」という言葉を概念化しようとしている<sup>67</sup>。彼らはこのような語りによって、在来の中国の歴史に存在していた、「伝統」と名付けた女性に関する諸規範から断絶した存在であり、更に「伝統」を転覆する存在でもあり、女性にとって完全に「新しい」天地を開拓する存在でもある、という様々な意味合いを「新婦女」に付与しようとしている。更に、この一連の二項対立の語りによって、彼らは「新婦女」に明るい未来を表象させようとしている。すなわち、おそらく、男性知識人は、在来中国の儒教文化から脱出し、欧米から舶来してきた、「新文化」を中国社会に樹立しようとする際、過去を清算し、「新文化」に対する憧憬や、中国社会の未来に希望を託したいという感情を、「新婦女」という用語によって満足させようとしていたのである。

ところが、男性知識人が主導した、明確に二分化した「新婦女」と「旧婦女」を、現実社会の女性集団に投影してみる際、どのような結果が招致されるのだろうか。

今日のわが国の女性は、大体二種類に区分することができ、普通、新女性と旧女性と呼ぶ。しかし、この新女性と旧女性の分け方は、相対的であり、絶対的ではない。勿論、新でもなければ、旧でもない女性もいるし、新の部分と旧の部分の半々有する女性も存在している。<sup>68</sup>

「新婦女」、「旧婦女」という対極の表現で、20年代の中国社会に生きた女性主体を区分する際に、この二つの言葉は、「女性」という社会的なグループ全体の実態を叙述しきれない、いわゆる顔筠のいう「新でもなければ、旧でもない女性もいるし、新の部分と旧の部分の半々有する女性も存在している」という、対処しえない事態を招来していたことや、当時、現実社会に生きた「新婦女」と「旧婦女」の境界線が、曖昧で、絶対化されたものではなかったことが、顔筠の叙述から確認できる。言い換えれば、男性知識人は、「新婦女」、「旧婦女」をもって、歴史の連続の中で生きる女性に対し、明晰な境界線を引こうとする。この行為自体の無意味さは、歴史の連続性や切断の不可能性を際立たせるのである。

「新婦女」を、それまで女性を規範化してきた中国社会在来の儒教文化とを断絶するための標識として樹立しようとする男性知識人は、彼らによって儒教文化批判というイデオロギーの役割を担わされた「婦女解放」においても、「新婦女」に対する期待を表している。

「今は、女子解放のいい時期だ。男性の圧迫によって、附属者とされてきた女子は、女子元来の自由を取り戻し、女子元来の権利を取り返すため、男性と戦ういい時期なのだ。しかし、このような運動を展開できようと、普通の女性を喚起する者は、ただ女子学生しかいない。一般の女性たちが、この運動を展開することができるよう、彼女らを確実に助けることができるのも、他の誰でもなく、ただ女子学生しかいない。一般の女性たちが、この運動を展開することができるよう、彼女たちを指導する者も、ただ女子学生しかいないのだ。女子学生は、女性のなかでは、優越な位置にあり、婦女解放運動には、重大な責任を持っている。」<sup>69</sup> という「婦女解放運動」における「新婦女」の役割論は、『婦女雑誌』において典型的なテキストとして考えられる。

男性知識人はまず、近代学校教育の経験の有無で、女性集団を「知識階級」としての「新婦女」と普通の女性とに区別した。次に、「女子元来の自由」、「女子元来の人間としての権利」を取り戻そうとする際、「新婦女」と普通の女性との関係を、「喚起する者」と「喚起される者」、「助ける者」と「助けられる者」、「指導する者」と「指導される者」のように序列化し、普通の女性を助けるのはただ「新婦女」しかいないのだと「新婦女」の役割を強調している。

要するに、男性知識人は、男性知識人の指導者—庶民という関係の類推として、「新婦女」—一般の女性という構図を作り、「新婦女」を女性の中の知的代表、「婦女解放運動」のリーダー的な存在にした。しかし、これまで見てきた批判言説が表しているように、彼らは同時に、「新婦女」に対して彼らの「知的女性」像に異なることに対しては、非常に厳しい見方をする。男性知識人の「新婦女」に対する態度のダブル・スタンダード性は看過できないところである。

## おわりに

以上、1920年代中国社会の「新婦女」に関する研究が極めて少ないなか、当時大変影響力を持った『婦女雑誌』に掲載された、「新婦女」言説を作り上げる主体である男性知識人や、少数ではあるが、「新婦女」自身の言説を主な手掛かりとし、「新婦女」に関する探究を試みてきた。

男性知識人にとっての「新婦女」は、彼女らは、非常に打算的で、近代学校教育を「結婚するための恰好の手段」<sup>70</sup>と考え、「学歴を嫁になるための立派な看板だと思込んでいる」<sup>71</sup>と断じるものであり、また、学生に相応しい質素な服ではなく、西洋から舶来してきた様々なファッションに熱心に追随し、派手な服で公の場に出入りしていると批判するものであった。しかし、本稿で示したように、「新婦女」自身の声を参照するとき、男性知識人の構築した「新婦女」言説内部に潜んだイデオロギーは明らかになってくる。つまり、それは「新婦女」を彼らの構築した画一的な女性像として叙述し、それによって、彼女らの多様な生存状態を不在にしてしまったことである。

一方、彼らは「新婦女」に強い意味付与も行う。彼女たちはファッションを追うような、社会の不良な風儀を矯正する役割を果たす存在であり、女性を規範化してきた、中国社会在来の儒教文化と断絶する存在であり、また、女性グループの中において、知的代表として、「婦女解放運動」の指導的な立場に立たせた存在でもあった。

「新しい女性」研究を志す筆者には、まだ少なからぬ研究課題が残されている。1930年代に入ってから、上海などの大都市で「新女性」と称された職業婦人の存在が目立ってきたように、その時代において「新しい女性」と称される存在は、流動的な存在である。従って、1920年代の「新婦女」研究は「新しい女性」に関する研究の一環に過ぎないが、時代とともに変わっていく「新しい女性」の変化過程やその全貌を究明するのに、欠かせない重要な一環でもある。このような作業は中国のモダニティーを考察する際の新たなアプローチの一つになるとと思われる。

(ふー・うえい／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)

掲載決定日：2003（平成15）年12月8日

## 注

1. 従来の近代中国女性史研究は、五四時期にスポットライトを当て、陳独秀、胡適、魯迅ら「代表的な男性知識人」の女性論しか取り上げないという問題性を抱えている。しかし、本稿で考察するように、五四時期の延長線としての1920年代において、「代表的な男性知識人」が提起した女性に関する議論は、より多くの普通の男性知識人、本稿において「通俗的な男性知識人」或いは「通俗化した男性知識人」と称する人たちによって、広く展開されていった。当然、「代表的な男性知識人」と「通俗的な男性知識人」との間には、明確な境界線が存在しているとはいえない。本稿

においては、二項対立的に二つのグループを設け、考察しようという意図を持っていない。ただ、テキストとして取り上げる『婦女雑誌』の主な寄稿者及び『良友画報』の読者層の状況を考慮し、本稿における「男性知識人」という概念を、「通俗的な男性知識人」を主体にしながら、「代表的な男性知識人」も含めることを意図している。なぜなら、西欧近代思想を中国社会に移植しようとした思想家たちばかりではなく、本稿で「通俗的な男性知識人」として同定する、主にジャーナリスト、各レベルの学校や大学で教師や職員として働く男性、都市のホワイト・カラーの男性、中等教育レベル以上の各学校や大学に在籍している男子学生及び海外にいる留学生などの存在を取り上げ、論じる必要があるからである。

2. 例えば、羅蘇文(1996)の『女性与近代中国社会』はその例である。
3. 夏瑞芳、鮑威恩、鮑威昌、高鳳池らは、1897年に上海の江西路徳昌里で株式会社としての商務印書館を創設した。後に張元済は新たな株主として商務印書館に加わり、彼が最初に商務印書館の編訳所の所長に任じられ、商務印書館の出版の業務に携わるようになった。張元済の努力により、当初、印刷の工場としてスタートした商務印書館は、近代企業の組織制度及び経営管理の方式で運営する近代的な出版会社に変じ、更に、資金力などの面においても、近代中国の出版業界のなかで、トップに君臨する地位に至った。商務印書館は近代中国の出版業の揺籃であり、後に上海で設立された重要な出版社のほとんどは、商務印書館の経営管理の方式を採用していた(許敏 1999, pp. 106-113)。
4. ちなみに、『婦女雑誌』が出版される直前の1914年には、袁世凱政府が『報紙条例』と『出版法』を発布し、新聞や雑誌の内容などを厳しく制限する、高圧な政策を取っていた(羅檢秋 1998, pp. 181-184)。これは、『婦女雑誌』が誕生する前の出版界の背景であり、『婦女雑誌』の編集方針を左右した要因の一つと思われる。
5. そのような紹介や説明などは、王蘊章、惲代英、胡愈之、蔣維喬などの男性知識人によって、主に当時の『婦女雑誌』の重要なコラム——「学芸」と「家政」で行なわれていた。
6. 1915年から1921年までのおよそ6年間、雑誌『新青年』などを拠点に、陳独秀、胡適ら代表的な男性知識人は、西欧近代思想の根幹である「個」の自由、「個」の解放を、中国社会においても指向的な価値を有するものとし、自我の確立を追求しようとした文化運動である。彼らは、「科学」と「民主」をスローガンとし、「個」の解放にとって障害とされた儒教を批判し、更に、それにより、清末にはじまった、「伝統」と名付けた在来中国社会の文化を批判する動きの頂点を導いた(林毓生 1989, p. 202)。女性の「個」や「人格」をめぐる議論も、この歴史的、社会的な文脈のもとに、中国社会に浮上してきた。周敘琪の指摘するように、男女交際、結婚、職業、参政権など、当時主に男性知識人によって提起された、「婦女解放」に関する様々な問題の検討は、いずれも女性の「個」や「人格」の確立に収斂されていったのである(周敘琪 1996, pp. 24-32)。
7. しかし、それはこの二つのコラムに載せられてきた内容がその後一斉になくなったことを意味しない。家事に関する科学知識の紹介などは誌面構成改革後の「家事研究」や「常識談話」などのコラムに掲載し続けられたが、第6巻を経て、第7巻1号からスタートした誌面のさらなる更新の後は、その文章の数量や掲載の順番から見れば、『婦女雑誌』における重みが次第になくなってしまふことが窺える。
8. 特に、エレン・ケイ、フランシス・パーキンス・ギルマン、ベーベル、ハバロック・エリスなどの理論が悉慮、呉覺農、喬峰(周建人)、克士(周建人)、豊子愷などによって、翻訳し、紹介されている。
9. 例えば、周建人「恋愛結婚與将来の人種問題」(8巻3号)、「配偶選択的進化」(9巻11号)、紫瑚「性的本能之高尚化」(8巻5号)、喬峰「結婚的制限」(9巻3号)、悉慮「産児制限與中国」(8巻6号)、高山「對於兩起離婚事件の感想」(9巻3号)、克士「愛情的表現與結婚生活」(9巻4号)、健孟「配偶選択與疾病」(9巻11号)、章錫琛「新性道德是什麼」(11巻1号)などは、その例である。
10. このような局面には、次の知的背景が存在していたのである。つまり、五四時期の代表的な男性知識人が、「新しい」思想を中国社会に樹立しようとする際、結局、彼らの言説は、思想と文化の面において、欧米と中国を序列化してしまうような知的生産を招致するにいたった。欧米は「進歩的」で、「文明的」である一方、中国は、その対極的な存在として、「野蛮的」で、「後進的」と表象されるようになった。「進歩的」対「後進的」という叙述の構図が、知識人の間により広く定着化されるにつれ、五四新文化運動の延長線としての20年代にも、欧米の諸思想などが直接に、あるいは日本経由で中国に幅広く紹介され、知識人の議論展開の拠にもなった。要するに、20年代の中国社会は、近代植民地的な知が展開される時代にあったのである。

11. 一方、Jacqueline Nivard は、1931年1月に出版された雑誌『中学生』に載せられた章錫琛の文章の中で言及された『婦女雑誌』の発行部数を根拠に、誌面更新後の『婦人雑誌』の発行部数は10,000部に及んだという(Jacqueline Nivard 1984、p. 37)。
12. 羅検秋によれば、『新青年』や『新潮』などは早い時期から婦女問題に注目していたが、「五四運動直後の1920年から1921年にかけての間に、思想界は婦女問題を検討するブームを迎えた。『婦女雑誌』や『新婦女』、『婦女評論』、『婦女声』、『解放画報』など婦人向けの雑誌は勿論、『少年中国』、『新生命』、『双周評論』、『少年世界』、『星期日』、『平民半月刊』なども婦女問題を検討する特集号を出版し、北京や上海などでは影響力のある新聞——『晨報』、『民国日報』、『時事新報』は婦女問題のコラムを開設した」(羅検秋 1998、p. 439)。
13. 例えば、『婦女雑誌』第11巻6号に掲載された、林文方や友松が応募した文章——「我所希望於女学生者」や、第10巻2号の陳徳徴「告知識階級の婦女」のなかには、「知識階級の女性」という表現を使っている。なお、その中味についての詳しい説明は第3節で検討する。
14. 1922年の時点において、商務印書館は中国国内外合せて36の都市に支店を設け、販売店の数が1000軒に及んだのである(許敏 1999、p. 114)。
15. 本稿でいう「新婦女」は、第3節で詳しく定義する。
16. 本稿においては、言語の由来に関する考察を除き、史料の翻訳や分析の場合、基本的に、「新婦女」という語を統一的使用することにするが、『婦女雑誌』に載せられた、当時の中国語の文章では、「新婦女」という用語が主に使われていたほか、「新女子」などの語も用いられていたことを明記しておく。なお、「新婦女」と「新女性」の用語の違いについては、1920年代には「新婦女」、1930年代には「新女性」と呼称することが多い。
17. 雲舫が、「新婦女所應鏟除外的幾種劣根性」では、「あの驚天動地の『五四運動』以来、国中の人々が婦人界に対し、誉め詞として使うし、また婦人界の中でも快くいう言葉は、『新婦女』である。」と述べている。(雲舫「新婦女所應鏟除外的幾種劣根性」『婦女雑誌』第6巻9号:p. 3)
18. 黄河済が「新婦女應有的覚悟」において、「『新婦女』という言葉は、今よく言われるものになったらしい。」と述べている。(黄河済「新婦女應有的覚悟」『婦女雑誌』第6巻10号:p. 18)
19. 顔筠「今日婦女的兩難」『婦女雑誌』第10巻3号:pp. 454—455。
20. 高山が「貴族式的新女子」において、「『学校に入ったのは、新婦女だ』という言葉に疑う人がいるものか」と述べている。(高山「貴族式的女子」『婦女雑誌』第11巻4号:p. 589)
21. 彭善彰が「女権与知識」では、在学中及び近代学校教育の経験者が「新女性」であるという見識を示している。(彭善彰「女権与える知識」『婦女雑誌』第10巻4号:pp. 599—603)
22. 前掲した高山と彭善彰の文章が二つとも、教育を受けた「新婦女」に対して批判的なものである。当時の世間では一般に教育を受けていることが「新婦女」の条件のように思われているが、高山と彭善彰は、教育を受けた女性を、実際に、辛い嫁の時期がないだけで、旧式の姑と変わらないとか(高山「貴族式的女子」『婦女雑誌』第11巻4号:p. 590)、教科書の知識を持つだけで社会に対する関心が薄いと(彭善彰「女権与知識」『婦女雑誌』第10巻4号:p. 601)、そうした女性を批判、あるいは揶揄している。この二つの文章は、「新婦女」に対しては批判的であるが、世間の「新婦女」に対するステレオタイプのイメージをかえって反映しているとみなすことができよう。
23. 俞慶棠「三十五年来中国之女子教育」李又寧編『中国婦女史論文集 第1輯』台湾商務印書館(台北)、1981年 pp. 343—377に引用された、中華教育改進社の調査データを再引用。
24. 当時、正式に実施されていた「壬子癸丑学制」は、児童が6歳で入学し、初等、中等、高等の三段階、合せて17年間または18年間の就業年限を経て、23或いは24歳で大学を卒業するという学制である。そのうち、初等教育には、4年間の初等小学校と、3年間の高等小学校が設けられている。初等小学校を卒業した生徒は、高等小学校や乙種の実業学校に入ることができ、高等小学校を卒業した生徒は、中学校、師範学校或いは甲種の実業学校に進学できる。中学校の修業年限は4年間で、卒業生は高等教育機関である大学や、専門学校、高等師範学校に進学できる。大学には予備科の3年間と、学部の3年或いは4年間の修業年限が設置されていた。清末の「壬寅癸卯学制」と比べれば、民国初期に定められ、実施された「壬子癸丑学制」は次の特徴を有する。まず、初等小学校では、男女の共学が許可されたということ。次に、高等小学校も含め、中等教育や高等教育においては、依然として男女別学の教育理念が貫かれていたが、女子に中学校、師範学校、実業学校のような中等教育や、女子高等師範学校のような女子向けの高等教

育機関の設置が規定されることにより、女子にも中等教育や高等教育を受ける機会を提供したこと。第三に、女子向けの高等教育機関としては、女子高等師範学校の設置だけが言及され、専門学校や大学の設置が明確に規定されていないことである（羅検秋 1998、pp. 53—54；周叙琪 1996、p. 63）。しかし、民国政府の教育方針とは別に、北京協和女子大学、南京金陵女子大学のような、教会が設置した女子大学があり、また、1919年に起きた五四運動以後に、各大学が女子学生を募集するようになった事情もある。従って、表1が示した初等小学校の女子学生数とは男女共学のなかの女子学生の数を指す。また、大学の女子学生数は、女子高等師範学校のような女子向けの大学に在籍している女子学生と、そのほかの大学に在籍している女子学生との合計である。それ以外の高等小学校や、中学校、師範学校、甲種職業学校の女子学生数とは、男女別学のなかの女子学生の数である。

25. 1925年から1926年までの間に、中学校、師範学校などを含めた、中等教育レベルの学校に在籍している女子学生の総数は19,037人で、中等以上の学校教育を受けている女子学生全体の89.92%占めている。1931年に出版された、民国教育部編『全国高等教育統計』の表15によれば、1928年、1929年、1930年の各大学に在籍している女子学生数は、それぞれ1,835人、2,520人、3,283人である。1928年から1929年までの間に、公立、私立を含めた全国の専門学校は、合計26校もあったが、女子学生がいる専門学校はそのうちの8校のみであった（俞慶棠 [1931] 1981、p. 367）。また、同時期の教育部編「高等教育概況」のデータによれば、全国の専門学校に在学している女子学生の総数は111人しかなかったのである。
26. 前掲俞慶棠と羅蘇文（1996）の研究を参照したほか、俞慶棠「三十五年来中国之女子教育」李又寧編『中国婦女史論文集 第1輯』台湾商務印書館（台北）、1981年 pp. 343—377に引用された、中華教育改進社の調査データで、1922年から1923年にかけての中国全国各省と特別地域内の初等小学校、高等小学校、中学校、師範学校の数や、各レベルの学校に在籍した学生数の状況を把握し、江蘇省の各レベルの学校数や在籍した学生数が、何れも中国全国各省と特別地域のなかで、上位であることが分かる。
27. 前掲俞慶棠「三十五年来中国之女子教育」pp. 353—362を参照。
28. 林文方「我所希望於女学生者 一」『婦女雜誌』第11巻6号：p. 876。
29. 胡焦琴「女子求学不僅在增益知識」『婦女雜誌』第9巻6号：p. 34。
30. 瑟盧「現代青年男女配偶選択的傾向」第11巻6号：p. 43。
31. 同上。
32. 瑟盧「現代青年男女配偶選択的傾向」第11巻6号：p. 52。
33. 『良友画報』は1926年2月から1945年10月までの20年間に、良友印刷会社に、総計172期が刊行された雑誌である。都市のホワイト・カラーの若者たちがその主な読者と思われる『良友画報』は、その販売数が、第2期、第37期、第45期から、それぞれ1万部、3万部、4万部に達し、香港や東南アジアの諸国でも販売されていた。出版期間、刊行された号数や、毎号の販売数でみれば、『良友画報』は大型の総合的な画報としては、民国時期に大変影響力のある雑誌の一つである（許敏 1999、pp. 191—201）。
34. 『良友画報』第10期（1926年11月）から第73期（1933年1月）までの間に、女子学生などの女性を集中的に取り上げるコラム。
35. 『良友画報』第37期の「婦女之頁」に掲載された写真と紹介文によれば、方子はフランスに留学した経験をもつ女性である。
36. 注33を参照。
37. 譚祥烈「我之理想的配偶」（徵文発表）『婦女雜誌』第9巻11号：p. 60。
38. 同上。
39. 同上。
40. 楊尚松「我之理想的配偶」（徵文発表）『婦女雜誌』第9巻11号：p. 61。
41. T. Y. 「我之理想的配偶」（徵文発表）『婦女雜誌』第9巻11号：p. 64。
42. 前掲郭如善『中国婦女生活史話』pp. 199—200。
43. 周建人「女子教育与女学生」『婦女雜誌』第11巻6号：p. 874。
44. TWDと称した人が、『婦女雜誌』の編集者の設定した「我之理想的配偶」というテーマの原稿募集に応募した文章。第9巻11号 p. 84。

45. 吳謹銘「我国目前婦女運動應取的方針」『婦女雜誌』第9卷1号：p. 119。
46. 郭如善『中国婦女生活史話』新風文化事業公司（台北）1983年 p. 200。
47. 夏曉虹の考察によれば、清末に、「高貴な家が女子を『深窓で育て人にまみえぬ』というしきたり」は、社会一般に守られているし、また男性教員が女学校で授業することで、「『男女は授受を親しくせず』という儒教の教義に反」する場合もあって、女学校を建設する当初、在来中国社会の女性に関する諸規範との衝突は激しくて、それらを乗り越えなければならなかったのである（夏曉虹 1998、pp. 40—41）。
48. 当時の眼鏡のマークの一つと推測する。
49. 彭善彰「女権与知識」『婦女雜誌』第10卷4号 p. 601。
50. 6卷8号の徐世衡「今後婦女應有的精神」、8卷1号の余竹籟「裝飾与人格的關係——敬告艶装的女学生」、9卷12号の顧實「對於新女性的罪言」、11卷6号の徐学文「我所希望於女学生者 二」などにも類似の議論が見られる。
51. 例えば、8卷5号曾志学女士「婦女之敵是誰」、8卷10号醒女士「誦了『婦女之敵是誰』以後」、9卷10号梁珠心「我的女子衛生觀」などには、ファッションの具体的な内容が言及されている。
52. 1915年前後、女子学生の間にも胸を締め付けるためのもの——チョッキが新しく発明されたという語り（「論小半臂與女子体育」、『婦女雜誌』第1卷1号）と、当時、中国において、ファッションの最先端にたつ上海の女性がブラジャーを着用しはじめたのは1930年代に入ってからのことであるという指摘（羅蘇文 1996、pp. 176—177；上海古今胸罩公司ホームページ：<http://www.saisc.com.cn/shanghai/gujin/index.htm>）とを参照すれば、ここの「胸を締め付ける」ものとは、ブラジャーではなく、チョッキと推測する。
53. 徐学文「我所希望於女学生者 二」『婦女雜誌』第11卷6号：p. 880。
54. 同上。
55. 例えば、余竹籟「裝飾与人格的關係——敬告艶装的女学生」（『婦女雜誌』第8卷1号）、顧實「對於新女性的罪言」（『婦女雜誌』第9卷12号）及び彭善彰「女権与知識」（『婦女雜誌』第10卷4号）などにはこのような議論が見られる。
56. 余竹籟「裝飾与人格的關係——敬告艶装的女学生」『婦女雜誌』第8卷1号。徐学文「我所希望於女学生者 二」『婦女雜誌』第11卷6号。
57. この議論は、余竹籟や徐学文などによって展開されていた。余竹籟「裝飾与人格的關係——敬告艶装的女学生」（『婦女雜誌』第8卷1号）。徐学文「我所希望於女学生者 二」（『婦女雜誌』第11卷6号）。
58. 梁珠心「我的女子衛生觀」『婦女雜誌』第9卷10号：p. 33。
59. 同上。
60. 前掲郭如善『中国婦女生活史話』pp. 203—204。
61. 曾志学「婦女之敵是誰」『婦女雜誌』と醒「誦了『婦女之敵是誰』以後」においては、「新婦女」がファッションを追従した派手な身飾りだけに熱中することは、「婦女解放」に背く行為であるという考えを示している。
62. 留意すべきなのは、当初、経済的な独立を目指し、学校に入った「新婦女」たちを待つ苛酷な社会的な現実とは、仕事を見つけることができず、あるいは仕事の条件が大変厳しいということである。
63. ちなみに、現代中国では、断髪で、白いシャツに長く黒いスカートという質素な服を着て、イヤリングやネックレスのような身飾りが一切ないという郭如善のような身なりで、五四運動期にナショナルリズム運動などに熱心に参加する「新婦女」像が作り上げられている。（馮媛『追憶中国新女性』<http://woman.263.net/chinawomens/shiright4.htm>）
64. 夢寰「務本女学級友会的演説」『婦女雜誌』第8卷5号：pp. 44—45。
65. 徐学文「我所希望於女学生者 二」『婦女雜誌』第11卷6号：p. 880。
66. 雲舫「新婦女所應鏟除的幾種劣根性」『婦女雜誌』第6卷9号：p. 3。
67. 信庸「新婦女の人生觀」（第6卷10号）、黄河濟「新婦女應有的覺悟」（同）や、唐敬果「我所望於女青年」（第6卷10号）などの文章からも読み取れる。
68. 顔筠「今日婦女的兩難」『婦女雜誌』第10卷3号：p. 454。
69. 林文方「我所希望於女学生者 一」『婦女雜誌』第11卷6号：p. 878。
70. 注28と同じ。
71. 同上。

## 史料・参考文献

### 中国語【史料】

『婦女雜誌』商務印書館（上海）1915年～1931年。

『良友画報』良友印刷公司（上海）1926年～1941年。（『良友画報』リプリント版、台湾商務印書館（台北）、1990年）

民国教育部編『全国高等教育統計』、1931年。

郭如善『中国婦女生活史話』、新風文化事業公司（台北）、1983年。

### 参考文献：

何瑋「近代中国女性史研究における『婦女解放』の一考察」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科『人間文化論叢』第5巻（2003）：pp. 399—408。

華梅『中国服装史』天津人民美術出版社（天津）、1989年。

Jacqueline, Nivard. “Women and the Womens’ Press: The case of the Ladies’ Journal (Funu Zazhi) 1915-1931.” *Republican China*. 11 (1984): 37-55.

Lin, Yu-sheng. *The Crisis of Chinese Consciousness*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1979. (林毓生『中国の思想的危機——陳独秀・胡適・魯迅——』丸山松幸、陳正醒訳、研文出版（東京）、1989年）。

呂美頤「中国近代女子服飾の変遷」『史学月刊』第212期（1994）：pp. 47—53。

羅蘇文『女性与近代中国社会』上海人民出版社（上海）、1996年。

馬良春など編『中国文学大辞典 第四巻』天津人民出版社（天津）、1991年。

孟悦・戴錦華『浮出歴史地表——現代婦女文学研究』河南人民出版社（鄭州）、1989年。

タニ・E・バーロウ「一九二〇年代、三〇年代の中国フェミニズムと『女性』の問題」〈国際ジェンダー研究〉編集委員会『国際フェミニズムと中国』伊藤るり・小林英里訳、御茶の水書房（東京）、2003年、pp. 91—116。

タニ・E・バーロウ、加藤茂生訳「中国のフェミニズムにおける『女性』の問題——一九二〇、三〇年代の優生学的言説——」『思想』第949号 岩波書店（東京）、2003年、pp. 4—22。

夏曉虹『晚清文人婦女觀』作家出版社（北京）、1995年。（夏曉虹『纏足をほどいた女たち』藤井省三監修／清水賢一郎・星野幸代訳、朝日新聞社（東京）、1998年。）

許敏『民国文化』熊月之編『上海通史・第10巻』、上海人民出版社（上海）、1999年。

俞慶棠「三十五年来中国之女子教育」李又寧・張玉法編『中国婦女史論文集 一冊』台湾商務印書館（台北）、1981年。

袁継成など編『中華民国政治制度史』、湖北人民出版社（武漢）、1991年。

周紋琪『一九一〇—一九二〇年代都会新婦女生活風貌：以「婦女雜誌」為分析实例』国立台湾大学出版委員会（台北）、1996年。

周汎・高春明『中国五千年女性裝飾史』学林出版社（上海）、1983年。

写真史料出典：

写真1：『良友画報』第36期

写真2：『良友画報』第38期

写真3：『良友画報』第38期